

## 第23回日本時間生物学会学術大会開催報告

吉村 崇<sup>✉</sup>

名古屋大学トランスフォーマティブ生命分子研究所

第23回日本時間生物学会学術大会を2016年11月11日から13日の3日間にわたって名古屋大学豊田講堂で開催させていただきました。今回の大会は本学会の2年に一度の国際化の取り組みの年にあたっていましたので、11日に“Towards understanding the molecular clockwork”と題する国際シンポジウムを、また12日、13日に「生物を理解し、制御する」と題する学術大会を開催しました。

国際シンポジウムには海外から今泉貴登先生、Carl Johnson先生、Achim Kramer先生、Ueli Schibler先生にお越しいただいた他、本間研一先生、本間さと先生のご厚意により、Aschoff-Honma Prize LectureとしてJohanna Meijer先生にご講演いただくとともに、John O'Neill先生にもお話しいただき、本学会の国際化に少なからず貢献できたのではないかと自負しております。

また、学術大会では特別講演として、私どものトランスフォーマティブ生命分子研究所(ITbM)の伊丹健一郎拠点長に合成化学、時間生物学、植物科学の融合研究についてお話しいただくとともに、国際統合睡眠医科学研究機構(MIIS)の拠点長の柳沢正史先生に「睡眠覚醒の謎に挑む」と題してご講演いただきました。特に柳沢先生のご講演は「睡眠遺伝子」がNature誌に掲載された直後のタイムリーなご講演となり、参加者の皆様には喜んでいただけないのではないかと思います。

大会特別企画シンポジウムではITbMの目指す異分野融合研究を意識して、「基礎と応用の融合」と題して、井澤毅先生、廣田毅先生、岡村均先生に最先端の研究をご披露いただきました。また、若手研究者の皆様を中心に、非常に意欲的かつ魅力的なシンポジウムを六つ企画していただき、大会を大いに盛り上げていただきました。今回の大会には337名の皆様にご参加いただき、119演題のポスター発表

をしていただきました。皆様のご参加と、ご発表に心より御礼申し上げます。日ごろから素晴らしい発表を聴ける学会こそが、楽しい学会であると感じています。今回の大会中、非学会員の参加者の皆様からも是非、入会したいとお声がけいただいたことから、大会長としての務めをなんとか無事終えることができたのではないかと考えています。

今回の大会は名古屋大学と名古屋大学博士課程教育リーディングプログラム、およびトランスフォーマティブ生命分子研究所の全面的なご理解とご支援を受けて実現しました。この場をお借りして御礼申し上げます。また、国際シンポジウムのポスターセッションはリーディングプログラムに所属する大学院生が運営にあたりました。次世代を担う大学院生の熱気を感じ取っていただければ幸いです。

本大会は、主催の日本時間生物学会のご支援のほか、寄付、広告、企業展示、ランチョンセミナーなどでご協賛いただいた企業および団体、さらには大会の準備に携わっていただいたプログラム委員、大会準備委員とその研究室メンバーの皆様なくして、開催することができませんでした。皆様に心から感謝申し上げます。本年、10月末に京都で開催される第24回大会がさらに盛会となることを祈念して、大会開催報告とさせていただきます。

✉takashiy@agr.nagoya-u.ac.jp